

A年顕現後第1主日・主イエス洗礼の日 マタイ3章13―17節

〔直訳〕

13 そのとき やつて来る イエスが ガリラヤから ヨルダン川の方へ

ヨハネに向けて 洗礼を施されるために 彼によって

14 だがヨハネは 妨げていた 彼を 言いながら、

「私は 必要が ある あなたによって 洗礼を施される、

そして あなたは 来るのか 私に向けて」。

15 だが答えて イエスは 言った 彼に向けて、

「あなたはそのままにしないさい 今は、

なぜならこのように 適して いる 私たちに

満たすことは すべての 義を」。

そのとき 彼はそのままにする 彼を。

16 だが洗礼を施されて イエスは すぐに 上がった 水から。

そして 見よ 開かれた 「彼に」 天が、

そして 彼は見た

神の霊が 降って来るのを

ちょうどように 鳩が 「そして」 来るのを 彼の上に。

17 そして 見よ 声 が 天の中から 言いながら、

「これは である 私の息子 愛する者、

この者に 私は満足した」。

〔新共同訳〕

13 そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。14 ところが、ヨハネは、それを思いとどまらせようとして言った。「わたしこそ、あなたから洗礼を受けるべきなのに、あなたが、わたしのところへ来られたのですか。」15 しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。16 イエスは、洗礼を受けると、すぐ水の中から上がられた。そのとき、天がイエスに向かって開いた。イエスは、神の霊が鳩のように御自分の上に降って来るのを御覧になった。17 そのとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言う声が、天から聞こえた。

①構成

① 13節と16節に「洗礼を施される」という受動態が用いられ、囲い込む形を作っている。13節では「ヨハネによって洗礼を施されるために」イエスはやって来るが、ヨハネとのやり取りのち、

イエスが「洗礼を施された」と述べる16節では、「誰によって」洗礼が行われたのかが述べられていない。16―17節ではイエスの洗礼の意味が明らかにされる。

⑥ヨハネによる洗礼を求めているイエスに、ヨハネは、「私はあなたによって洗礼を施される必要がある」と語る。13―14節ではイエスとヨハネのどちらが洗礼を施す者であるか、すなわち、どちらが相手に優っているかが問題とされている。

⑦13―14節と16―17節に挟まれた15節がこの段落の中心である。満たすべき「義」とは何かが問題となる。

⑧16―17節はイエスの洗礼の様子を描いているが、ここでは「天が開かれた」「神の霊が降って来る」「天の中から声が」というように、イエスの洗礼には神の力が働いていることが示されている。

② 洗礼を施されるために

⑨預言者マラキは、終わりの日にはメシアに先立ってエリヤが再来すると預言していた（マラ3:23）。らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締めた洗礼者ヨハネの登場はエリヤを彷彿とさせるものであった（王下1:8）。ヨハネの姿を見た人々はマラキの言葉を思い出した。ヨハネは「天の国は近づいた」と声を上げて回心を求めたが、彼のもとに集まって来る群衆に交じって、イエスもガリラヤからやって来る。13節の「洗礼を施されるため」は目的を表す不定法であり、イエスが自分から洗礼者ヨハネによる洗礼を求めたことを表している。なぜイエスはヨハネから洗礼を受けたのか。罪のないイエスは回心の洗礼を受ける必要はないはずである。この問いに対する答えがこの後のイエスの言葉によって明らかにされていく。

⑩イエスはヨハネから洗礼を受けようとするが、それを知ったヨハネはイエスを思いとどまらせようとする。14節の「妨げていた」は未完了過去形であり、意志の未完了、あるいは反復・継続の未完了である。後者であれば、ヨハネは「何度も妨げ続けた」の意味となる。このようなヨハネの行動はイエスの洗礼を求める思いの強さを暗示している。

⑪ヨハネがイエスの洗礼を妨げ続けたのは、イエスこそ彼の後から来て、「聖霊と火による洗礼を授ける方」だと知っていたからである（三:11）。ヨハネは「私はあなたによって洗礼を施される必要がある」と言うヨハネの言葉は、イエスこそ「聖霊と火による洗礼を授ける方」だとヨハネが告白したことを示している。

⑫このヨハネの告白に対応するのが16―17節である。天が開けて神の霊が降り、天から「これはわたしの愛する子」という声が聞こえる。

16 だが洗礼を施されて、イエスはすぐに水から上がった。

そして見よ、開かれた、「彼に」天が、

そして彼は見た

神の霊が降って来るのを

ちょうど鳩が「また」来るように、彼の上に。

17 そして見よ、声が天の中から、言いながら、

「これはである、私の息子、愛する者、

「の者に 私は満足した」。

「そして見よ」の繰り返しによって、「天が開かれた」と「天の中からの声」の並置が強調されている。天が開けて神の霊が降っただけでなく、天からの声も響いた。16―17節は、14節のヨハネの告白に対応して、イエスが誰であるかを天が告げ知らせている。16節では視覚的に、17節では聴覚的にイエスの正体が露わにされる。

⑥ イザヤ63章19節に「どうか、天を裂いて降ってください」とあるように、天が開くとは終末の出来事であり、啓示の始まりを意味する（ヨハネ51、使一〇11）。マタイではヨハネもイエスと同じ言葉を用いて、「回心しなさい。なぜなら天の国は近づいた」と宣教しているが、イエスに向かって天が開いたことにより、いよいよ「天の国」が近づいたことが明確にされる。

⑦ 「神の霊が降って来る」は、イエスがメシアであることを保証する出来事である。イエスがメシアであることは、17節では「これは私の愛する息子」という神の言葉で明らかにされる。並行箇所では「あなたは私の愛する息子」と述べられており、この言葉は「あなた」、すなわちイエスに向けられている（マコ11、ルカ三21）。しかしマタイでは、「これは」と述べられ、第三者に、ヨハネに向けてイエスのことが語られる。この宣言は、イエスに洗礼を授けることを拒み、自分こそイエスから洗礼を受けるべきであると言って、イエスがメシアであることを認めたヨハネに対する神からの答えである。ヨハネの告白に対して、神がイエスの正体、すなわち神の子であることを明かす。

⑧ 神は「イエスに私は満足した」と語る。「満足する」と訳した動詞はエウドケオーである。この語は基本的には「何かに満足し、それをよしとする」ことを表す。パウロは自分の命を与えたいと「喜んで願った」ほどにテサロニケの人々をいとおしく思ったが（1テサ二8）、彼らもエルサレムの聖なる者たちを援助することに「喜んで同意した」（ロマ一五26）。この語は人間を主語とする用例よりも神を主語とする用例のほうが多く、全用例の三分の二を占めている。いけにえを「好まなかった」神は、キリストが自分の体をささげることが許し（ヘブ一〇6）、宣教という愚かな手段によって、信じる者を救おうと「お考えになりました」（1コリ一21）。共観福音書の用例（6回の内5回）では、キリストが神の「心に適う者」と呼ばれている。神は神の国を与えることを「喜ぶ」方であるが（ルカ一二32）、神の心に「適わなかった」先祖たちが荒野で滅ぼされたように（1コリ一〇5）、もしひるむようなことがあれば、神の心に「適わない」者とされる（ヘブ一〇38）。

③すべての義を満たす

⑨ 15節のイエスの言葉によって、「イエスが洗礼を受ける」ことを今はそのままにすべき理由が語られる。

あなたはそのままにしなさい 今は、

なぜならこのように 適して いる 私たちに

満たすことは すべての 義を。

「義（ディカイオシュネー）」という語はマタイが好んで用いる言葉である（共観福音書の全用

例八例のうちマタイで七回。「義」は神の義を表すためにも、人間の義を表すためにも用いられる。ここではどちらの「義」を表しているかは、イエスの言う「私たち」が誰を指しているかに深く関わっている。「私たち」には次の二つの可能性がある。

⑦民に対して、イエスと洗礼者ヨハネが「私たち」と表されている。

⑧イエスとヨハネの他に、民も含めて「私たち」と表されている。

イエスが直接語りかけているのはヨハネであるから、⑦の可能性もあるが、⑧の解釈がよりふさわしいと思われる。イエスがヨハネのもとにやって来たのは、「彼によって洗礼を施されるため」（13節）であり、人々も同じ理由からそこに集まっている（6節）。この関連を踏まえると、イエスは民の一人としてヨハネの前に現れたと考えられるからである。

⑨イエスが「聖霊と火で洗礼を受ける」特別な存在であることは、ヨハネのみならずイエスも自覚していたはずである。そのイエスが「今は」人々と同じように洗礼を受けてほしいと願っている。イエスが民の一人となったからには、15節の「私たち」には民が含まれるはずである。

⑩次に「義」に関しては、⑦の解釈にあるように「私たち」がイエスとヨハネに限定されるなら、「義」はイエスとヨハネを通して働く「神の義」を表すことになる。マタイでは、イエスとヨハネは共に、「回心しなさい。なぜなら天の国は近づいた」と言って宣教を行う（三二、四一）。

ヨハネは天の国を告げ知らせるイエスの働きを担う仲間として描かれている。洗礼は、神の計画に従って死に赴く二人がその先取りとして行わねばならない出来事である。

⑪しかし、15節の「私たち」が民をも含むなら、この「義」は人間の義を表すことになる。イエスは、人が神に取るべき態度、「人間の義」を自ら示す。預言者の時代が終わりを告げ、天の国が現れようとする「今」は、ヨハネから回心の洗礼を受けることこそ、神が人に望むことである。ヨハネによる洗礼は、神の支配に身をゆだねて生きることを表明する回心を表すものであり、イエスの救いを受けるための備えである。その備えを行うことを神は人に望んでいる。だからこそ、イエスは民の一人となって洗礼を願ったのである。

⑫神の愛する子の時代が始まる

⑬イエスは「ヨハネによって洗礼を施されるために」ヨルダン川へとやって来る。13節では「ヨハネによって」と洗礼を施す人物が明示されているが、16節では、イエスが「洗礼を施された」とだけ述べて、誰によって洗礼が行われたのかは示されていない。文脈から考えれば、イエスに洗礼を施したのはヨハネであるのは確かである。しかし、16節ではそれを述べずに、ただ受動態を用いることによって、イエスの洗礼には神の力が働いており、それを神が望んでいることを暗示しているのかもしれない。

⑭ヨハネは先駆けとして、イエスが与える救いを受ける備えのために、回心を表す洗礼を受けていたが、イエスの洗礼によって備えの時は終わり、神の愛する子イエスによって天の国が明らかにされる時が始まる。イエスの洗礼はメシアによる宣教が開始されることを告げる出来事である。イエスは備えの時にヨハネの洗礼を受けることは「適している」と述べるが、この語には「当然である」という意味もある。神の思いに従い、ヨハネによる備えの時を真摯に生きることが、イエスの救いに至る道となる。